呼吸器内科

（スタッフ）

部長　　：安東　優
主任医師　：菅　貴将
嘱託医　　：矢部　通俊（2021. 4 月から）
　　：表　絵里香
　　：内田　そのえ（2021. 3 月まで）
専攻医　　：髙木　龍一郎（2021. 4 月から）
　　：里永　賢郎　（2021. 4 月から）
　　：廣田　昇馬（2021. 3 月まで）

はじめに、2020 年 3 月から続いている新型コロナウイルス感染症の大流行で本年も大変忙しい年になりました。しかし、大きなトラブルがなくこれまでどおりの診療を行うことができました。

人事に関しては、令和 3 年 3 月 31 日、内田そのえ医師が豊後大野市民病院へ、廣田昇馬医師が新別府病院へ転勤しました。4 月 1 日から新たに静岡がんセンターから矢部通俊医師、臼杵コスモス病院から髙木龍一郎医師、新別府病院から里永賢郎医師が赴任し、異動のなかった菅貴将医師、表絵里香医師と合わせて、6 名体制で診療、教育を行いました。

（診療実績）

入院患者数は 601 名で、昨年よりも 33 名減少しました（図 1）。入院の内訳は、緊急入院 398 名、予定入院 203 名であり、救急対応が多いことがわかります。外来患者数は、延べ患者数 11,757 名、新患 953 例でした。本年は昨年と比較して、総数、新患患者数いずれも減少しました（図 2）。新型コロナウイルス感染症で定期通院患者の受診控え、および当院への紹介を控えたためと考えられます。入院内訳は肺がん 227 名、肺炎 112 名、びまん性肺疾患 69 例、慢性閉塞性肺疾患 16 例 、アレルギー性疾患 9 例であり、コロナ肺炎は 79 例でした。本年は肺がんの比率が下がりましたが、コロナ肺炎の割合が 4.9％から 13.1％に増えました（図 3）。当科は中等症以上の患者（SpO_2 93% 以下で酸素投与が必要となる患者）を主に担当することになっております。第 4 波、第 5 波は、デルタ株などで重症度が高く、通常の診療に影響がありました。ワクチンの普及で一旦入院患者がいなくなりましたが、昨年末からのオミクロン株の流行（第 6 波）で、入院患者が急増しました。しかし当院においては呼吸不全の患者数がそれほど多くなかったことは幸いでした。気管支鏡検査については、呼吸器内科、呼吸器腫瘍内科合わせて 295 例ありました。昨年は 239 例でありましたが、コロナ禍にも関わらず検査患者数が増えました。本年呼吸器内科で実施した気管支鏡検査数は 252 例（重複例含む）あり、経気管支的肺生検（TBLB）169 例（67.1%）、気管支肺胞洗浄検査（BAL）27 例（10.7%）、経気管支的リンパ節生検（TBNA）46 例（18.2%）でした。TBLB は肺がん、転移性肺腫瘍、びまん性肺疾患の診断に欠かせない検査ですが、本年は昨年よりも飛躍的に増えました。また TBNA も増えました。一方 BAL については、約半数に減少しました（表 1）。気管支鏡検査の対象疾患として、肺がんが 7 割を占めました。肺がん疑いの診断率は 65.4%、リンパ節腫大症例に対する TBNA の診断率は 86.1％でした（表 2）。

当院は地域がん診療連携拠点病院（高度型）であり、肺がん診療に力をいれています。当科の役割としては肺がんの診断はもとより、呼吸器腫瘍内科、呼吸器外科、放射線科、病理部門と密に連携をとり、最善の治療を提供することだと思います。毎週水曜日にキャンサーボード、2 か月に 1 回症例検討会を開催し、診断治療に悩む症例について十分な検討をしております。また、臨床試験にも複数登録し、新たなエビデンスの構築を目指しております。喘息、慢性閉塞性肺疾患については主に外来で診断、治療をしています。近年多くの新薬が上市され、コントロールもよくなりつつありますが、治療に難渋する患者の紹介も増えております。適切な分子標的薬の提供を実践しています。重症肺炎、重症呼吸不全に関しては、開業の御施設から多く紹介されます。救急科と連携して最善の治療ができるように努めております。その他、診断や治療に苦慮する症例、稀少症例などは、日々のカンファレンスで提示し、スタッフ全員で議論するようにしています。このような症例については、学会発表や論文報告できるように努めています。

（研修・教育）

当科では新・内科専門医制度で求められる技術・技能評価手帳に記載された項目は研修中にすべて経験することができます。また、呼吸器外科と共同で日常診療にあたっており、研修手帳（疾患群項目表）に記された疾患の多くを経験できるものと思います。研修医の先生は指導医とペアになってもらい主に病棟を担当してもらっておりますが、希望があれば外来診療の研修も可能です。

2020 年は 1 年目研修医　中尾、脇田、佐藤、市原、古屋、大嶋、小畑、甲斐、木下、黒瀬、調、濱田、安部、伊藤の各先生、2 年目研修医　柴田、山中、馬場、山下、豊田の各先生が呼吸器内科の研修を行いました。

（今後の方向性）

来年も新型コロナ感染症の流行は収まらないと思われますので、重症患者の治療をしっかり行ってまいります。また、日常診療に追われる中でも、学会発表を積極的に行い、可能であれば論文報告を目指します。呼吸器内科は肺がん領域、アレルギー領域、感染症領域、呼吸不全領域など多彩ですが、近年新しい新薬や治療法が開発されつつあります。これまで以上に積極的に臨床試験に参加して、新しいエビデンスの確立に貢献したいと考えています。

（文責：安東優）

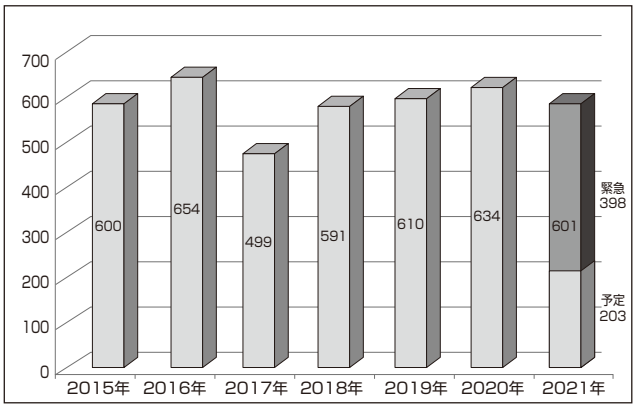


図1　入院患者数の推移

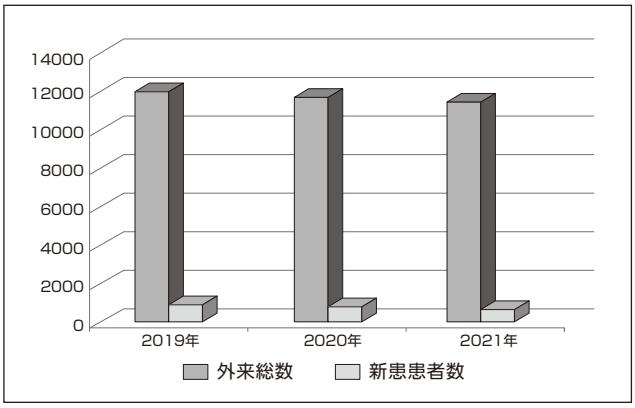
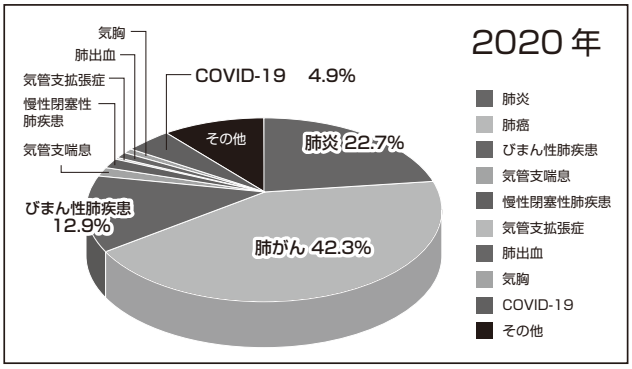


図2　外来患者延数



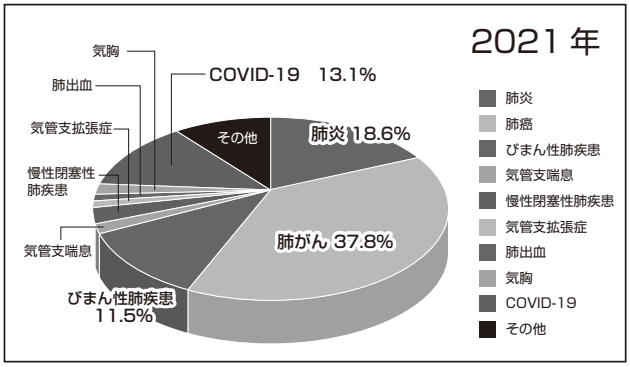


図3　疾患別入院患者内訳

表1　気管支鏡検査実績

	2020年		2021年	
	人数	割合	人数	割合
気管支観察	13	5.9 %	10	4.0 %
気管支肺胞洗浄（BAL）	57	26.0 %	27	10.7 %
気管支肺生検（TBLB）	113	51.3 %	169	67.1 %
経気管支リンパ節生検（TBNA）	37	16.8 %	46	18.2 %
合計	220	100 %	252	100 %

表2　気管支鏡対象疾患

	人数	頻度
肺がん・転移性肺がん	136	67.3 %
サルコイドーシス	22	10.9 %
間質性肺炎	21	10.4 %
抗酸菌感染症	13	6.4 %
気管支拡張症・出血	7	3.5 %
アスペルギルス症	3	1.5 %
合計	202	100 %